

# 先天性處女膜閉鎖ニ因スル腔血腫ノ一例

岡山縣病院産婦人科第一研究室ニテ

助手 須賀松三郎

余ノ敢テ此稿ヲ草スル理由。

(一) 本例ハ其大サニ關シ甚ダ稀有ナル者ニ屬ス、即チ Ehhmann ノ統計的觀察ニ因レバ Falk ノ報告例(二十一歳ノ一女性ニ於ケル先天性處女膜閉鎖ニ因スル妊娠七箇月大ノ子宮腔血腫及ビ兩側ノ林檎大ノ輸卵管血腫ノ一例)ガ世界ニ於ケル最大ナル者ナリト記載セラル、余ノ例ハ單純ナル腔血腫ノミニシテ、而モ其上界臍上二横指ヲ越エタリ。

(二) 如斯キ腔血腫ノ存在ニ關ラズ、子宮ハ未ダ血腫ヲ營爲セズ、却テ平常ノ約 $\frac{1}{2}$ 大ニ相當ス、即チ本例ハ Birk 氏說ニ適應セズ。

(三) 余ハ嘗テ本誌第三百二十九號及ビ三百三十二號ニ於テ、先天性腔缺損症ニ因スル子宮及ビ兩側輸卵管血腫ニ關シテ、又近畿婦人科學會雜誌第四號及ビ五號ニ於テ、先天性處女膜閉鎖ニ因スル子宮及ビ腔血腫ニ就キテ、聊カ吾人ノ卑見ヲ論述シタル事アリ、即チ本例ハ如上報告例ノ追加的乃至知見補遺的ノ意義ヲ有ス。

## 實驗例。

患者氏名。杉○チ○○。年齢。十八歳。

大正六年十月十九日下腹痛、下腹部腫瘍、外陰部腫瘍ヲ主訴トシテ乞診

ス。

患者ヲ知ラズ。

## 既往症。

血族の關係。

血族中生殖器其他ノ畸形ヲ有スル者無シ、又遺傳的疾患ナシ、父母及ビ患者ハ花柳病ノ既往ヲ有セズ、患者ハ生來健康ニシテ、著

須賀—先天性處女膜閉鎖ニ因スル腔血腫ノ一例

須賀—先天性處女膜閉鎖ニ因スル腫血腫ノ一例

三、主訴ノ經過。

(一)下腹痛ノ經過。

大正五年四月十一日早朝突然下腹部一般ノ特異ナル痙攣樣刺痛及ヒ腰痛ヲ發シ、爾來四日間就床ス、爾來各月定期性二十日—十一日ヨリ四—五日間同様ノ疼痛發作ヲ繰返シ、且漸次増強ス、大正六年八月中旬ヨリハ、殆ド持續性ニ上記ノ苦惱アリ。

(二)下腹部腫瘍形成ノ經過。

患者ノ初メテ之ヲ認メシハ大正六年二月下旬ニシテ、入浴中下腹部ノ摩擦ニ際シテ偶然之ヲ發見ス、當時上界ハ殆ド臍高ニ達シ、其形狀、球形、表面平滑、輕壓痛アリテ移動性ナリキ、爾後發作毎ニ増大シテ、遂ニ今日ノ大サニ達シタリト云フ。

(三)外陰部腫瘍形成ノ經過。

大正六年二月十日上廁中偶然發見ス、當時ハ約雞卵大ニシテ、緊張シタル彈力性硬度ヲ呈シ、且壓縮性ヲ有スル一體塊トシテ認メタリ、爾後漸次増大シタル事勿論ナリ。

其他ノ事項。情慾。全然平常。機發春動。大正六年一月頃ヨリ。代償性月經。ナシ。

現症。

體格中等、營養佳良、一般ニ女性ノ通性ヲ有シ、生殖器以外ニハ畸形ノ異常ナシ、乳房。中等度ニ發育シ、壓迫スルモ分泌物ヲ漏ラサズ。

腹部ノ外診的所見。

視診。腹部ハ一般ニ膨隆スレドモ、特ニ下腹部ニ於テ著明ナリ。

三三二

觸診。下腹部ニ於テ約大人頭大ノ長橢圓形ノ一大腫瘍ヲ觸知ス、其上界ハ臍上二橫指ヲ越エ、其境界可成著明ナリ、表面ハ全ク平滑ニシテ彈力性硬度ヲ呈シ、又壓痛無ク移動性ニシテ假性波動ヲ呈ス、精檢スルモ子宮及ビ輸卵管ヲ觸知シ得ズ。

打診。腫瘍上ハ一般ニ純濁音ナリ。

下腹部ノ計測。

下腹部ノ最大周圍徑(臍下約二橫指ニテ計ル) 八〇 cm

臍部周圍徑 六九・五 cm

臍ト恥骨縫際間 一八 cm

右側臍棘線 一六・五 cm

左側臍棘線 一六 cm

外陰部ノ所見。

陰阜、大小陰唇。平常ノ如ク發育セリ。

陰毛。少數。

外尿道口。正常位ニアリ、而シテ其周圍ノ粘膜ハ肥厚シテ一見處女膜樣ノ外觀ヲ呈シ且一般ニ充血セリ。

尿道。小指ハ大ナル抵抗無クシテ膀胱内ニ挿入シ得レドモ、其際中等度ノ疼痛ヲ訴フ。

腔口部。下腹部ヲ壓迫スレバ、此部ニ於テ、殆ド林檎大ノ一體塊ヲ目撃ス、其表面ハ粘膜ニテ被蔽セラル、其色彩ハ平常ノ粘膜ノ如ク、更ニ詳言セバ下方ノ大部分ハ周圍部ハ赤色、中央部ハ青色ニテ、其境界判然タリ、且青色ナル中央部ニハ、其中心部ヨリ周圍ニ向ヒ、放射狀ニ走レル多數ノ

小血管アリテ美觀ヲ呈ス、唯上ノ $\frac{1}{2}$ ノ部分ノミハ暗褐赤色ヲ呈シ、即チ内容ノ血液タル事ヲ透見セシメ居レリ。

其硬度ハ彈力性軟度ニシテ、壓縮性著明ナリ、而シテ其周圍ハ小陰唇ノ粘膜ニ移行セリ、換言セバ此腫瘍ハ腔口部ヲ全ク充填セリ、而シテ其長徑七cm横徑六cmナリ、又癥痕其他既往ニ於ケル炎症ノ經過ヲ語ル可キ何者ヲモ發見シ得ズ、其他ノ部位ニ於テ、處女膜樣ノ組織ヲ發見シ得ズ。

直腸ヨリノ検査所見。

直腸前壁ニ於テ、肛門ノ直上部ヨリ、緊張シタル彈力性硬度ノ一膨隆物ヲ觸知ス、該腫瘍ハ示指ノ達スル範圍ニ於テ、更ニ尙ホ餘程ノ上方迄、前壁ニ於テ其存在ヲ推定セシム、硬度ハ平等ナル彈力性ニシテ別ニ特別ナル抗抵チ有スル部分ヲ證明セシメズ、又本腫瘍ノ後方及ビ側方ニ他ノ腫瘍樣

抗抵物即チ子宮及ビ輸卵管血腫ヲ觸知シ得ズ。

### 臨床的診斷。

先天性處女膜閉鎖ニ因スル腔及ビ子宮血腫。

内診ニ際シテ余ノ子宮體ヲ觸知シ得ザリシ理由。

Frankenstein, Alberts, Skutschノ注意スル如ク、如斯キ大ナル血腫ノ存在スル場合ハ、其後上部ニ於テ證明セラル可キ子宮體ハ、寧ろ觸知シ得ザルヲ通例トス、而モ大多數ハ緊張セル腹壁ノ所有者タル未產婦ナルニ於テオヤ、然レドモ、余ハ既往症ト血腫ノ大サトチ考慮シテ、子宮血腫ノ存在ヲ確信シ如上ノ診斷ヲ下シタリ、而モ手術ニ際シ未ダ血腫ヲ溢爲セザル子宮ヲ觸知スルニ及ビ余ハ一驚ヲ喫シタル次第ナリ。(後段手術記事參照)

### 手術 (術者須賀)

大正六年十月二十一日執行、型ノ如ク腹壁及ビ局部ノ消毒ヲ嚴行シ、一%ノ「アロカイン」液七ccヲ以テ閉鎖處女膜ニ局所麻醉ヲ施シ、約五分後該膜中ヨリ可及の大ナル縱菱形ノ組織片ヲ切除シタリ、膜ノ厚徑約〇・四cmナリ、茲ニ於テ約六立ノ特有ナル内容ヲ漏ラシタリ、(術後計量シテ得タル數字ハ約五・五立ニシテ「ガーゼ」其他ニ附着シタル量ヲ約〇・五立ト見做シタリ)該血液ハ暗褐赤色水飴樣稠度ニテ、凝固セズ無臭ナリ、此血液量ハ既往症ト子宮ガ未ダ血腫ヲ營爲シ居ラザル事ト、及ビ血液ノ濃縮機轉ト腔粘膜ノ吸收機轉トノ幾分ノ參與トヲ考フル時ハ何人モ相當ナル數量トシテ、首肯シ得可シ、内容ノ排除ニ從ヒテ血腫ハ漸次縮小ス、切開後約五分ニシテ内診スルニ、意外ニモ其上後部ニ平常ノ約 $\frac{1}{2}$ 大ノ後傾子宮ノ存在ヲ初メテ認識シ、同時ニ小ナル子宮腔部ヲ明ニ觸知シ得タリ、下腹部ヨリ輕壓ヲ加へ、内容ヲ充分排除シタル後、菱形ノ創縁ヲ互ニ相對セル内面ト外面トニ於テ縫合シ、手術ヲ終

須賀—先天性處女膜閉鎖ニ因スル腔血腫ノ一例

三三四

ル、所要時間約三十五分、術中全ク安靜ニシテ、毫モ疼痛ヲ訴ヘズ。  
 血腫内容ノ鏡檢。

染色所見ノ要點左ノ如シ、即チ赤血球ハ何レモ完全ニ破壊セラレテ唯微細ナル顆粒狀物トシテ存シ、又色素顆粒及ビ僅少ノ白血球アリ、白血球ハ多ク不規則ナル形狀ヲ呈シ、且多量ノ顆粒攝取ニ因リ著明ニ増大シ、其核ハ多數ハ多形核也、又剝離上皮ノ痕跡量アリ、又「ヘマトキシデン」結晶、「ヒヨレストエアリン」結晶、新鮮ナル赤血球及ビ白血球ハ毫モ證明シ得ザリキ。

#### 同上内容ノ細菌學的檢査。

術中完全ニ無菌的ニ採取シタル内容ヨリ扁平培養ヲ行ヒ、又細菌學的ノ染色檢査法ヲ施行シタルガ、結果ハ全部陰性ナリキ。

#### 閉鎖處女膜ノ組織學的檢査。

剔出組織片ヨリ大ナル「チエロイジン」切片ヲ作り、「ヘマトキシリン、エオジン」ニテ染色シテ檢シタリ（切片ノ厚徑一〇「ミクロン」以下）所見ノ大要ハ左ノ如シ。

主トシテ鬆粗結締織ヨリ成リ該組織中ニハ無數ノ小血管ヲ含ミ、其内半部ニ於テハ、其中ニ稍大ナル滑平筋纖維ノ束ガ比較的規則正シク排列セルヲ見ル、上皮ハ内外兩面共ニ多層扁平上皮ノ定型的ナル者ニシテ、基底部ニハ高キ圓柱上皮アリ、然レドモ移行形上皮ハ發見シ得ズ、再三總テノ切片ヲ精檢スルモ癍痕組織乃至小圓形細胞浸潤ヲ證明シ得ザリキ。

#### 解剖的診斷。

先天性發育異常ニ因スル處女膜閉鎖及ビ腔血腫。

#### 術後ノ經過。

極メテ佳良、術後第六日抜絲、術後十三日ニシテ欣然トシテ退院シタリ、腔粘膜ハ手術當日ハ大ニ柔軟且高度ニ

發赤シ居タリ、皺襞ハ初メハ輕度ニ形成セラレシモ、漸次著明トナリ又粘膜ノ硬度モ漸次加ハリ來レリ、色彩モ亦稍赤味ヲ減ジタリ、而シテ術後第六日ニ於テハ殆ド平常ノ腔ト異ラザルニ至リヌ、子宮ハ前屈シ且輕度ニ後傾シ、兩側附屬器ニハ異常ナシ、又術後第六日迄ハ極ク少量ノ陳舊性血液ヲ漏ラシ居タリ。

退院後約一箇月ニ於ケル内診的所見。

腔。 平常。

子宮腔部。 稍小。

外子宮口。 橫橢圓形稍小。

子宮。 前屈シ平常ノ $\frac{1}{2}$ 大ヨリ稍大、硬度形狀平常。

兩側附屬器。 異常ナシ。

粘膜。 平常。

分泌物。 微ニ綠色ニシテ粘稠少量。

術後ニ於ケル上記ノ腔ノ收縮狀態ハ Henkel u Esmond ノ報告例ト殆ド同様也。(實驗例終)

### 結 論。

(一) 眞性無孔處女膜ト眞性閉鎖處女膜トノ鑑別。

(二) 腔血腫内容ノ腔壁ニ及ボス組織的變化。

(三) Tussenbroek 氏非炎症說ノ眞否。

(四) 腔血腫内容ノ子宮内逆流機轉及ビ其時期。

(五) 大ナル腔血腫ヲ營爲セル閉鎖處女膜症ノ處置如何。

(六) 先天性處女膜閉鎖ニ於ケル該膜中ニ存スル癥痕組織ノ檢索及ビ其意義。

須賀—先天性處女膜閉鎖ニ因スル腔血腫ノ一例

須賀一先天性處女膜閉鎖ニ因スル腫血腫ノ一例

(七)閉鎖處女膜切開後ニ於ケル腔壁ノ萎縮狀態。

以上ノ七項ニ關シ嘗テ吾人ノ發表シタル見解ハ(本誌第三二九號、同第三三二號、近畿婦人科學會雜誌第四號、同第五號ノ須賀論文參照)本例ノ實驗ニ因リ、何等之ヲ改ムルノ必要ヲ認メザル者ナリ。

擱筆スルニ當リ余ハ恩師安藤教授ニ對シ謹ンデ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

(彌生十八日稿)

●正 誤

前號横川君論文正誤左ノ如シ

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一〇	八	經驗ニ就キ	經驗ニ基キ	二六	八	(同上同試驗)	(同上日試驗)
一五	七	傾ケルノ鱗片 (第百十八表)	傾ケルモノ、鱗片 (第百十九表)	二九	一〇	〇・五	〇・〇五!
二二	六	人腸液	人工腸液	三〇	六	胃及腸液ノ	胃液又ハ腸液ノ
二三	三	前ニ試験	前ニ試験	三一	一	モノニ於テ	モノ、中ニ於テ
二三	三	人工腸液〇・一%	人工腸液ハ〇・一%	三三	七	得ルモノ、如シ	得ルモノナルヲ知レリ
二三	四	膽汁ヲ注 タル	膽汁ヲ注加シタル	四二	一三	實行力	穿力